

[2022 年日本経済学会春季大会 報告予定論文]

[2022 年日本 NPO 学会 報告予定論文]

[2022 年総合人間学会 報告予定論文]

ヒューマノミクス—人間性経済学の探究（主要論点の紹介）*

岡部光明 #

2021 年 12 月

【概要】

現在の主流派経済学においては、人間は自己の効用（満足度）最大化を目的として合理的に行動する主体であると前提されている。しかし、多くの学問分野の研究によれば、人間は、そうした側面を持つだけでなく、ウェル・ビーイング（幸せ）を目指している、利他心も併せ持つ、相互につながりの感覚を持つ、顕現化されていない潜在能力を持つ、などの認識が一般的になっている。経済学がこうした本来的な人間像を活かした学問（“humanomics”）へと脱皮するうえでの課題は非常に多い（別紙 1、別紙 2）。そのうち、本稿では（1）経済学において人間の多面性を取り込むには「コミュニティ」とその役割を積極的に考慮する必要がある、（2）そのため社会を従来のように二部門（市場・政府）モデルによって理解するのではなく三部門（市場・政府・コミュニティ）モデルによる理解に切り替える必要がある、（3）三部門モデルの妥当性は経済人類学や経済政策の既往理論を援用して示すことができる、など近著（岡部 2022）の幾つかの中心的論点を紹介した。

キーワード: ウェル・ビーイング (well-being)、アダム・スミス「道徳感情の理論」、人的ネットワーク、コミュニティ、二部門モデル、三部門モデル、実践哲学

* 本稿は、近刊拙著『ヒューマノミクス—人間性経済学の探究』（日本評論社、2022 年 5 月刊行予定、約 450 ページ）の主要論点を要約して紹介した論文である。

慶應義塾大学名誉教授、明治学院大学国際学部附属研究所名誉所員。http://www.okabem.com/

はじめに

経済学が対象とする人間活動の領域は著しく広い。その経済学では、一定の人間観に基づいて社会の仕組みが理解され、その分析結果が公共政策にも反映されてきた。すなわち、現在の主流派（新古典派）経済学においては、人間は自己の消費量増大（効用最大化）を目的に行動する主体であり、社会はそうした個人の集合であるというのが一般的な前提ないし標準的な理解となっている（methodological individualism¹）。これらの視点は、いずれも分析を容易にするための前提であり、それによって経済学は数学的展開が容易になるとともに、他の社会科学には見られない厳密でかつ美しい体系を構築してきた。その結果、経済学は「社会科学の女王」と評されるに至っている。

しかし、経済学以外の社会科学分野における研究や人文学の領域における研究結果は、概して経済学のこうした単純な人間観に疑問を投げかけるものが多い。すなわち

(1) 人間は単に消費量の増大を目指して生きているというよりも（踏み込んだ議論が必要であるが）幸せないしウエル・ビーイングを目指している²、(2) 人間は利己心だけでなく相手や周囲にも配慮する利他心（ないし道德感覚）も併せ持つ、(3) 人間は原子論的な個人的存在というよりも繋がり（きずな）をもったネットワーク的存在である、(4) 人間は誰もみな顕現化されていない大きな潜在能力を持つ存在とみる必要がある、といった視点である。

主流派経済学においては、こうした人間観はいずれも明らかに排除されているが、経済学が人間性を生かした学問になるためには、これらの要素を積極的に取り込むべく再検討する必要があるのではないか。これが筆者の基本的な問題意識と研究方向である。

このような視点に立つ経済学は、human economics（人間性経済学）あるいは単純化して“humanomics”（ヒューマノミクス）と呼ぶことができよう。事実、この名称は国内外の文献で既に散見される。しかし、それらの内容は概して限定的なものにとどまっており、主流派経済学のどの部分をどう変革すればどのような新しい展開が可能かについては具体的な議論はなされていない（[図表1](#)）。

¹ 岡部（2017：36-37 ページ）を参照。

² 岡部（2017：6章および7章）を参照。

図表 1 書名にヒューマンノミクス (humanomics) という用語を含む書籍例

	著者と書籍名	概要	特徴と評価
A	篠原三代平 (1984) 『ヒューマンノミクス序説— 経済学と現代世界』	・人間行動、人間と社会、人間と環境など、数々の側面を序説風に整理したもの (本書の序文)。	・「人間の学としての経済学を我流に考えてみたもの」(序文)であり、体系的な試みではない。
B	U. J. Heuser (2008) 『Humanomics : Die Entdeckung des Menschen in der Wirtschaft』 (ドイツ語。邦訳あり)	・心理学や神経学においては人間の理解が一層進んできており、このため経済学はそうした成果を取り込む必要性が大きい (書籍副題: 経済学における人間性の発見)。	・人間は幸福を追求する存在だと理解すべきなど他領域の研究成果の紹介に重点。一方、経済学がそれらを具体的にどう取り込むかについての言及は乏しい。
C	V.L. Smith and B. J. Wilson (2019) 『Humanomics : Moral Sentiments and the Wealth of Nations for the Twenty-First Century』 (英語)	・アダム・スミスの二つの代表的著作 (『国富論』のほか特に「道徳感情の理論」) には、利己性だけでなく社会性を持つ人間観が提示され、それは現代の実証分析でも保証されている。このため経済学には新しい方向が必要。	・人間は単に利己的存在ではないという現代の実証分析 (実験経済学、ゲーム理論) が細かく紹介されている。しかし、その結果を現代経済学にどう取り込むかについての具体的提案には乏しい。
D	D. N. McCloskey (2021) 『Bettering Humanomics : A New, and Old, Approach to Economic Science』 (英語)	・経済学の始祖アダム・スミスは人間の多様な側面を理解していたので、現代経済学は哲学、文学、文化人類学、歴史学などの成果を幅広く吸収する必要がある。	・人間性について従来多様な学問領域から多様な理解がなされていることを豊富に記述。しかし、現代経済学はそれらを具体的にどう吸収すべきか、またしるかには言及がない。

(注) 筆者作成。

それらの著作に対して近刊拙著 (岡部 2022、その目次は別紙1を参照) では (1) 人間観を変える科学的根拠はどこに求められるのか、(2) その結果どのような社会観 (具体的には社会理解の「三部門モデル」) が生まれるのか、(3) そうした社会観の妥当性と優位性は経済理論や政策論の分析道具を援用してどう説明できるのか、(4) 個人の幸福追求 (自己実現など) とより良い社会の構築を両立させる方途は存在するのか、といった一連の問題を探求して筆者なりの回答を提示したものである。

すなわち本書 (岡部 2022) では、既存の経済学の中にそうした豊かな人間観を取り込んで経済学を拡張するとともに、それを基にした社会理解や政策論に立てば従来よりも望ましい社会が実現できることを主張し、それを論証することを試みた。こうした研究は、筆者の知見による限り国内外にまだ見当たらない^{3 4}。

³ ちなみに、日本企業がかつて従業員など人間を大事にしたこと (それによって自動車・電機・半

以下、第1節「人間性を重視する経済学の必要性」では、経済学において人間性がいかに狭隘化された理解に立っているかをまず明確にし、その是正が必要であることを示す。第2節「アダム・スミスの幅広い人間観とその継承」では、人間は利己性だけを持つ存在だとする従来のスミス観には大きな誤解があること、そしてスミスは人間には利己心だけでなく倫理や人間の潜在能力を重視するなど幅広い人間観を持つ研究者であったことを明らかにするとともに、拙著ではスミス本来の人間観を継承することを述べる。第3節「人間社会の的確な理解：三部門モデル」では、人間の本性をよりの的確に取り込めば、社会は「市場と政府」によって構成されると捉える経済学の標準的な理解（二部門モデル⁵）を改め、人間社会は「市場・政府・コミュニティ」によって構成されるという理解（三部門モデル）に切り替える必要があることを主張する。第4節「三部門モデルの学問的根拠」では、三部門という発想は経済人類学の観点から比較的古くからみられていることを指摘するとともに、その妥当性を現代の経済政策理論に依拠して説明する。第5節「個人の潜在能力を開花させる『実践哲学』とその特徴」では、人間が自己啓発によって潜在能力を開花するならば、人間は自己実現に伴う幸せを得ることができただけでなく、各自の本来的な使命発動によって社会に貢献できるとする自己啓発の道があることを紹介する。そして、最後に簡単な結語を記した。

第1節 人間性を重視する経済学の必要性

現代経済学は多様な展開を見せているが、それを鳥瞰的に捉えると大きく二つの流れに区分できる（[図表2](#)）。

現代経済学の大分類

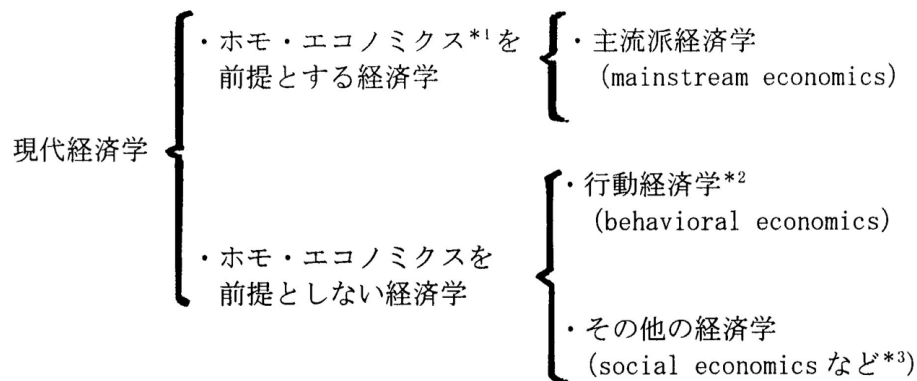
導体などの分野で欧米企業を驚かせる成果を挙げたこと）から、日本企業の特徴を表現する上で「資本主義」に代えて「人本主義」という造語が経営学者によって発案されたことがある（伊丹1987、宮島2011）。しかし拙著（岡部2022）は、単に企業についてだけでなく、経済システム全体を理解する上でも、カネ（資本）よりヒト（人間）を中心に据える必要があることを基本視点としており、上記の人本主義よりも一層広い視点に立つ。

⁴ ごく最近『人の資本主義』という題名の書物（中島編2021、13名の経済思想史研究者と中心とする小論文や討議によって構成）が刊行されたが、同書は「人間は人間的になって行くものだ（human co-becoming）」（序文vページ）という編者の英語造語を中心に据えたものであり、発想がややわかりにくいという研究手法が本書とは大きく異なる。

⁵ 経済学ではこうした理解が当然とされているため、教科書においてわざわざ「二部門モデル」という表現が使われないのが実情である。

一つは、(A) 人間は利己的かつ合理的に行動する存在（ホモ・エコノミクス、経済人あるいは経済的人間）だという前提のもとに展開する経済学であり、もう一つは (B) そのような前提を置かない経済学である。

図表 2 現代経済学の大分類



*1 人間は「消費拡大による効用最大化を目的として利己的かつ合理的に行動する存在である」という人間像。

*2 行動経済学とは、利己的で合理的な経済人の仮定を置かない経済学。人間行動の観察から出発する経済学。現実的な政策手法に結びつき易いことが特徴。

*3 Social Economics、Socioeconomics、New economics など様々な呼称があり、内容も多様。(出典) 岡部 (2022) 図表 1-1。

つまり前者 (A) では、現世人類 (ホモ・サピエンス) は「経済人」 (ホモ・エコノミクス) であると前提されており、こうした視点に立つ研究が概ね現在の主流派経済学 (mainstream economics) を構成している。

そして後者 (B) では、二種類の経済学を区別することができる (同図表)。一つは「利己的で合理的な経済人の仮定を置かない経済学」としての行動経済学 (behavioral economics) である。そこでは、人間の現実の行動や心理を観察することを通して、人間には非合理的な場合もあることを解明し、それを基にして経済学を組み立てる、あるいは政策の有効性を高めるための手法を明らかにする、といった研究方向に重点が置かれている⁶。

もう一つは、行動経済学以外の各種経済学である。それらの名称や内容はかなり多

⁶ こうした新しい研究分野に対してノーベル経済学賞がすでに2回授与されており、米国では経済学の重要な研究領域の一つになりつつあるほか、日本でもその研究が徐々に増えている。その評価と課題は、岡部 (2022、1章1節) を参照。

様であるが（前掲図表2の右下）、ここでは（1）人間の行動については他の学問領域の成果をも踏まえつつ経済学を展開する、（2）経済人間を前提するのではなく人間は社会的な存在と捉える（したがって社会規範、社会的正義、倫理などの側面も考慮しつつ人間の経済活動を理解する）、という二つの点が共通する大きな特徴である。近刊拙著（岡部 2022）はこうした流れに属するものであり、従来の経済学とは異なる（それを拡張する）一つの新しい経済学、あるいは一つの新しい社会科学の枠組みを提示することを意図している。

主流派経済学の強さと弱さ：ともに人間観に由来

現代の主流派経済学は、基本的に経済人あるいは経済的人間（ホモ・エコノミクス）の前提を置いて展開している。そして、経済学はその仮定の単純明快さによって発展してきており、またそれが公共政策に反映している面も少なくない。

例えば、ホモ・エコノミクスを前提して発展してきたマイクロ経済学によってマクロ経済学の基礎づけを行おうとする動き⁷、経済学の論理（人間の利己的・合理的行動）を非経済現象（結婚、宗教など）に対しても適用する傾向（経済学帝国主義）⁸がある。一方、そうした発想に基づく公共政策の歪み（規制撤廃と競争第一主義）⁹、市場要因の蔓延に基づく倫理の侵食¹⁰、などもみられる。

つまり、現代経済学は多面的な発展を遂げてきているが、輝かしい面の反対側には、暗い側面が不可避免的に生まれている。だから、社会科学が本当に強いものになるためには、主流派経済学の人間観の妥当性を改めて吟味するとともに、それを本来的な人間観に置き換えることによって、新しい経済学（人間性経済学、“ヒューマノミクス”）に切り替えてゆく必要がある。

そうした認識の主要点を整理したものが図表3である。ここでは、主流派経済学が依拠している人間観（主要3点）を列挙するとともに、それを今後どのような本来的

⁷ 個人は、一定の制約条件のもとで自己の効用最大化を図るとというのがマイクロ経済学の基本的出発点であるので、マクロ経済現象もそうした定式化を援用して説明しようとする近年の動向のこと。

⁸ ギャラリー・ベッカー（1930-2014）は、それまで経済学以外の社会科学（社会学、人口学、犯罪学など）において扱われてきた人間行動を、経済学の理論を拡張することによって説明する研究を展開、その功績により1992年にノーベル経済学賞を受賞した。例えば、ワシントン・コンセンサスと称される政策はその典型である（岡部 2017:48 ページ）。

⁹ 例えば、ワシントン・コンセンサスと称される政策はその典型である（岡部 2017:48 ページ）。

¹⁰ 具体例は、岡部（2022）9章1節、10章1節、10章3節を参照。

な人間観に置き換える必要があるか、そしてその場合、とりわけどのような事項を検討する必要があるかを整理している。

図表 3 主流派経済学の人間観とそれを拡張する必要性

主流派経済学における前提	本来的な人間観	再検討を要する事項 (例)
1. 唯物主義 人間が関心を持つのは、現実 に享受できるもの (財やサービ ス) だけ。	・人間が究極的に追求するの は、財やサービスというよりも 一般的には幸福 (happiness; well-being; eudaimonia)。	・幸福とは何かについて再検 討が必要。また職業の意義 (仕 事は非効用とするのが経済学 での認識) を再考する必要。
2. 利己主義 人間が追求するのは、財やサー ビスの増加に基づく自分の満 足度 (効用) の増大。	・人間は生命を維持するために 利己的動機を持つが、そのほか に利他的動機 (altruism) も併 わせ持つ。	・利他的行動も実は利己的動 機に起因するという経済学の 捉え方 (解釈) は再検討が必要。
3. 個人主義 上記のような個人の行動は、 他人から影響を受けることがな く、また他人に対して影響する こともない (原子論的人間観)。	・人間は原子論的な存在ではな く、相互に関心を持ち、相互に 影響を与えあう社会的な存在 (social network; community; virtue ethics)。	・人間社会の本来的性質であ るつながり (社会的ネットワ ーク)、コミュニティ、徳倫 理などの視点も容れて社会を 理解する必要。

(出典) 岡部 (2022) 図表 1-5。

まず、主流派経済学では、「経済人」という前提つまり人間は唯物主義、利己主義、個人主義という三つの思考ないし行動原則を持つ存在である、と前提されている (図表 3 の左列)。しかし、人間は本来、享受する財やサービスを増大するというよりも究極的には幸福を追求していると理解すべきであり、また利己的動機だけでなく利他的動機も併せ持つとともに、相互に関心 (コミュニティ感覚) を持つ存在である、というのがより妥当かつ学問的に実証された認識である。このため、経済学が従来考慮外としてきた幾つかの重要事項を考慮に入れる必要がある。例えば、モノの豊かさ以外によってもたらされる幸福 (well-being)、仕事の (非効用でなく) 効用や真正の利他的行動、人的ネットワーク、コミュニティ感覚、倫理観、そして人間の潜在的な能力などである。人間のこうした側面は、心理学、神経生理学、脳科学、社会学など多くの学問領域の研究によって確立された認識となっているので、経済学は、容易ではないものの人間のこうした側面を考慮してゆく必要性が大きい¹¹。

¹¹ 筆者は、こうした方向での研究をすでに『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして』(岡部 2017) において提示したが、近刊拙著 (岡部 2022) は、それをさらに深化・体系化し

第2節 アダム・スミスの「幅広い人間観」とその継承

現代の主流派経済学においては、人間は物質的豊かさを利己的・合理的に追求するという人間観（ホモ・エコノミクス）が前提されている。そしてその人間像は、経済学の始祖アダム・スミスが前提していた人間像にほかならない、という理解がなされる場合が多い。確かに、スミス『国富論』の一節には人間の利己的な側面が記述されており¹²、それが引用される場合が非常に多く、このためそれが人口に膾炙するスミス人間観となっている。

しかし、その一節をもってアダム・スミスが抱いていた全体的な人間像だとみなすのは、大きな誤りである。なぜなら、スミスは『国富論』（1776年）に先立ってもう一つの主著『道徳感情の理論』（*The Theory of Moral Sentiments*, 1759年）を刊行、同書では、人間は原子論的存在ではなく他人の幸福に気をかける社会的存在であるという認識を提示するとともに、道徳ないし倫理の本質を理論的にかつ詳細に論じているからである。

本節では、従来みられたスミスの人間観に関する上記の誤解を解くとともに、スミスが本来抱いていた人間像（人間の社会性や利他性、それらを反映した道徳ないし倫理性を持つとする人間観）をまず明らかにする。次いで、スミスの人間観にとって重要なもう一つの側面である人間の潜在能力を論じる。

スミスの人間観(1): 利己性のほか利他性や社会性も重視

スミスが上記二つの著作において解明しようとしたのは、結局、人間社会を一体として維持し繁栄させるための見えない力の探究である。つまり社会秩序とは何か、そして人間の本性からどのようにしてそれが導かれるか、という問題である。ここで社会秩序とは、社会を構成する人全員が何らかのルールにしたがうことにより、平和で安全な生活を営むことを指す。そうした状態が実現するには、人間を単なる利己的な存在とみるのではなく、人間は他人に関心を持つ存在であるという前提（いわば公理）

たものである。例えば後者においては、アダム・スミスの人間観を継承する必要がある、三部門モデルはカール・ポランニーをもって嚆矢とする、旧著で言及した実践哲学は思想的・心理学的・統計学的基礎を持つ、などを新たに論じている（拙著の目次は別紙1）。

¹² 「われわれが夕食にありつけるのは、肉屋、酒屋、パン屋の慈悲心のおかげではなく、彼ら自身の利益に照らしてそうだからである。われわれは、彼らの人間性に対してではなく彼らの自愛心に訴えかけるわけであり、また、われわれが何を必要としているのかを彼らに伝えるのではなく、彼らの利益を話題にするのである。」（Smith 1776: 14 ページ、第1編第2章、岡部訳）。

から出発することにより論理的に説明できる、というのが『道徳感情の理論』の骨子である。

このため同書では、人間は自らの利害関心を超えた「公平な観察者」(impartial spectator)を自分のなかに置いている、という見方を提示し、それをもとに正義、慈恵、道徳感覚、フェアプレーといった概念を用いつつ議論を進めている。つまりスミスの社会観は、人間個人の感情と行動から説き起こして人間社会を理解しようという発想に立っているため、現代的に言えば「ミクロ的基礎を持った道徳論、法律論、社会秩序論」であるといえよう。

スミスの人間観(2): 人間の潜在能力も重視

スミスは、上記のとおり、人間は経済的ないし利己的な動機だけでなく、倫理、正義、慈恵など様々な社会的な側面も併せ持つ存在であると理解していた。さらにスミスは、人間は誰でも日常生活において未だ現れていない潜在能力をもつ存在である、という見方ないし信念を持っていたことも、重要である。

人間の潜在能力に関するスミスのこうした理解を高く評価し、潜在能力の顕現化が人間の幸せにつながるという見解が近年提示された。それはアマルティア・セン¹³によるスミスの再評価と功績である。彼は、人間の潜在能力の開花は幸福(良い生活、well-being)につながるという理解を提示し、スミスの理解を拡充した。

幸せないし良い生活がどんなものであるかを捉える場合、三つの視点を区別することができる(岡部 2022: 図表 3-1)。すなわち(1)効用(utility)を基礎とするアプローチ(主観的アプローチ)、(2)財産(resource)を基礎とするアプローチ(主観的アプローチ)、そして(3)センが提示した潜在能力(capability)アプローチである。ここでは詳細な議論は省くが¹⁴、潜在能力アプローチでは、主観的要素と客観的要素の両方が取り込まれている点に特徴がある。

人間性重視の経済学へ

以上で概観した本質的な人間観(それはアダム・スミスによってつとに認識されていた)は、現代の経済学にどのように生かせるだろうか。あるいは、主流派経済学を

¹³ 1998年にノーベル経済学賞を受賞。

¹⁴ 詳細は、岡部(2022)第3章を参照。

どう変革することができるだろうか。その骨子を整理したのが図表4である。

図表4 主流派経済学と人間性重視の経済学一対比

	人間についての理解	人間の行動目的	社会を理解する方法
主流派経済学の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・利己主義 ・合理的な選択と行動 ・個人主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・財・サービスの消費拡大による自分の効用最大化。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人（消費者/労働者）と企業によって構成される市場、そしてそれを補正・補完する政府。 [2部門モデル]
人間性重視の経済学の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・利己主義のほか利他性も併せ持つ。 ・合理的行動だけでなく、場合によっては限定合理性あるいは非合理的行動も。 ・人間は原子論的な存在でなく他者と絆を持つ社会的な存在。 ・潜在的な能力も考慮する必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単に消費拡大ではなく幸福（快適な生活、良い生活、意義深い人生）の追求。 	<ul style="list-style-type: none"> ・民間部門では個人と企業に加え、非営利部門(NPO等)の存在を積極的に位置づけ、これに政府が加わって社会を構成。 [3部門モデル] ・個人の幸福追求が社会の改革に結びつくような発想（市場メカニズムを補完する思想）を探究することも視野。

(出典) 岡部 (2022) 図表 2-1。

まず人間の本性については、主流派経済学では、利己主義、合理的な選択と行動、個人主義の3点を前提しているが、それらを大きく変更する必要がある。すなわち、人間は(1)利己性だけでなく利他性も併せ持つ、(2)その行動には限定合理性 (bounded rationality) が伴うだけでなく場合によっては非合理性もみられる、(3)人間は原子論的な存在でなく他者と絆を持つ社会的な存在である、そして(4)人間の潜在的な能力も考慮する必要がある、などの新たな前提に置き換える必要がある。

そして人間の行動目的としては、財・サービスの消費拡大による自己の効用最大化という従来の前提は単にそのうちの一つに過ぎず、人間は単に消費拡大ではなく幸福（快適な生活、良い生活、意義深い人生）の追求を目的としている¹⁵、という理解に改める必要がある。

さらに、人間社会を理解するための方法も更新し、新しい社会観を導入する必要がある。

¹⁵ 詳細は、岡部 (2017) 7章2節、および岡部 (2022) 43-44 ページを参照。

ある。すなわち、社会は個人（消費者/労働者）と企業によって構成される市場が一方にあり、他方には市場の機能を補正ないし補完するために政府が存在するという従来の見方（社会理解の二部門モデル）を改める必要がある。そして民間部門では、個人と企業を含む市場に加え、非営利部門(NPO/NGO等)の存在を積極的に位置づけ、これに政府が加わった三つの部門によって社会が構成されていると捉える視点（三部門モデル）に置き換える必要がある。そして、できうれば、個人の幸福追求がより良い社会の構築に結びつくような思想（市場メカニズムを補完する新たな思想）を探究することも、容易ではないが視野に入れるべきではなかろうか。拙著（岡部 2022）は、基本的に以上のような問題意識と方向性を持って議論を展開したものである。

第3節 人間社会的確な理解：三部門モデル

以上のような人間観を採用する場合、社会を理解するには、従来の二部門（市場・政府）モデルに代えて三部門（市場・政府・コミュニティ）モデルによるのが最も単純かつ合理的な方法である。端的に言えば、三部門モデルは、既存の社会科学を統合する一つの最も直感的かつ比較的簡単な方向だと筆者は考えている。

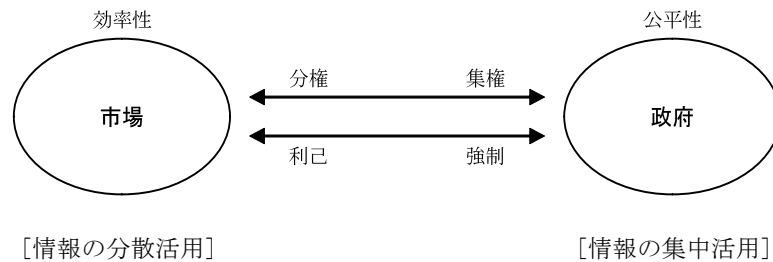
二部門モデルから三部門モデルへの切り替え

新しく提案する三部門モデルを従来の経済学と対比してみよう。これまでの経済学では、民間主体が活躍する市場が社会作動の基本メカニズムであると位置付ける一方、これと対極的な目的と行動動機を保つ主体として政府が想定されている（**図表 5-1**）。そして市場においては、家計や企業が利己的、分権的に活動すると理解され、それは「効率性」を追求する仕組みであるとされる。一方、政府はそうした民間部門の活動に伴う様々な問題（市場機能では解決できない公共財の供給など）に対処するために権限を集中保有し、強制力を持ってそうした問題を補正する機能を持つと認識される。従って政府は「公平性」を追求する役割を持つ、と理解されてきた。

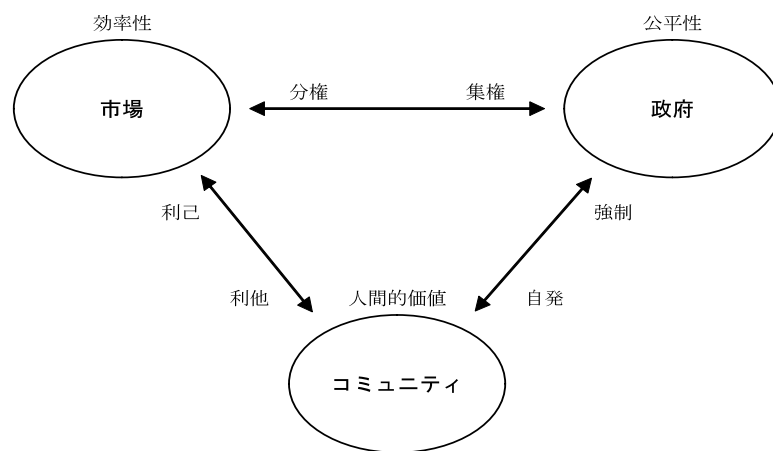
ところが、現代社会においては従来の二分法（市場と政府）においてはいずれの主体にも該当しない中間的な集団や組織（ここではこれらを一括してコミュニティと呼ぶ）が無視できない規模で存在する。そして、その部門を構成する主体の行動動機は市場や政府と大きく異なっている。つまり個人の利己主義が現れる市場に対してコミ

図表5 経済学の従来の視野と今後望まれる視野

(1) 経済学における従来の視野



(2) 今後望まれる視野



(出典) 岡部 (2022) 図表 1-7。原図は岡部 (2009) の図表 3。

コミュニティは、広く捉えると「利他主義」を行動原則としており、また政府のように強制力を行使する主体ではなく「自発性」が行動面での特徴となっている（図表5-2）。こうしたコミュニティでは、人間が自律的ないし利他的に行動することが基本となるほか、行動の動機も他の二つの部門とは大きく異なり、例えば幸福感など人間的価値が重要である点にも特徴がある。だから、この部門は、従来の民（私）とも官（政府）とも異なる「公」であり、いわば公共性を持つ新しい民間セクターとして位置づけることができる。

第三部門の行動特性

ここで導入した第三部門の行動特性を既存の2部門と対比すると、図表6のようになる。まず、社会における全ての組織は、いずれも情報をどのように収集し、処理し、そしてそれをもとに意思決定する仕組みを持つかという視点から特徴づけることが

図表6 社会を構成する代表的な三つの部門とその行動特性

主体	情報への対応	行動規範	パフォーマンス特性
市場民間主体 (個人・企業)	・情報は個別経済主体によって分散保有され、集中化の必要はない。	・企業の場合は利益、個人の場合は満足度（究極的には幸福）の追求。	・市場メカニズムの作用により効率性を維持。 ・その一方「市場の失敗」を随伴。
政府 (中央・地方)	・民間部門から情報を獲得し、集中する必要。	・法律、行政権力。	・国民から委嘱された主体であるため「エージェンシー（代理）問題」（非効率性）が随伴。
コミュニティ (NPO/NGO など)	・情報対応形態は中間的であり、多様な対応がある。	・多様な行動動機が併存。 ・信頼や評判を重視。	・効率性の高い組織がある一方、規律付けの弱さにより機能不十分なケースも存在。

(出典) 岡部 (2022) 図表 8-2。

できる。このような情報対応のあり方みると、まず市場の中で行動する民間主体(企業・個人)は、個別主体がそれぞれ一次情報を分散保有しており、その情報はすべて市場取引（具体的には価格形成）に反映されるので情報集中化の必要はない。一方、政府は、民間部門から情報（行政上必要となる各種の定量的・定性的データ）を権限を伴って獲得し、集中することによって初めて機能できる。これに対してコミュニティは、市場メカニズムの中で行動するわけでないため、情報対応面での位置づけは政府と市場における民間主体の中間的な様式になる、と理解できる。

次に、行動規範をみると、政府は法律および行政権力を基礎としているのに対して、市場民間主体は利益の追求（企業）ないし満足度の追求（個人）を行動動機とする主体であると理解できる。一方、非営利民間部門（NPO など）では、組織としてもまたそれに関与する各ステークホルダーとしても、多様な行動動機が併存していると考えられることができる。またその組織においては、民間企業のような所有者（株主）とそれによる規律づけを欠くので社会的認知自体がとりわけ重要であり、このため民間営利企業や個人とは異なり、信頼（credibility）や評判（reputation）の維持・増大が一つの重要な行動規範になる、と考えられる。

こうした組織および行動規範を前提とする場合、これら3主体のパフォーマンス特

性を次のように導くことができる。まず市場民間主体は、市場メカニズムの作動により効率性が維持されることを期待できる。ただ、市場メカニズムが作動しない状況があること（市場の失敗¹⁶）も認識しておく必要がある。一方政府は、国民から委嘱された主体であるため、その行動にはエージェンシー（業務の委託）関係に伴う非効率性¹⁷が不可避である。これに対して、NPO のパフォーマンスがどのようなものとなるかは事前的には特定しがたく、あくまで実証の問題となる。

なお、コミュニティには多様な形態があるが、それを表わすうえで従来二つの表現がある。一つは市場と政府に対して位置づけられるので「第三部門」という表現であり、もう一つは「非営利部門」という呼び方である。その差異は、名称だけでなく歴史的経緯や実体の差異にも関係してくるが¹⁸、岡部（2022）では便宜上互換的に使っている。

第4節 三部門モデルの学問的根拠

上記のように人間社会を三部門モデルによって理解できることの根拠は、大別して二つの学問領域から提示することができる。すなわち、経済人類学からの裏付け、そして経済政策理論に基づく論証である。

(1) 経済人類学からの裏付け

第一の根拠は、経済人類学の視点から直接的に裏付けられる。具体的には、それはカール・ポランニーによる人類社会の三機能モデルの発想を現代的に発展させたもの、といえることである（岡部 2018；同 2022：8章2節）

すなわち、ポランニーは、人間社会の経済的側面を歴史的に見ると三つの行動原理によって支えられて機能してきたという考え方を展開した。その三つとは、互酬（reciprocity）、再分配（redistribution）、交換（exchange）である（[図表7](#)）。互酬とは、贈与や相互扶助を意味する（ここでは市場機能は関与しない）。再分配とは、

¹⁶ 岡部（2022）第8章脚注1を参照。

¹⁷ ある仕事を自分自身が行うのではなく、誰か代理者（エージェント）を雇って行う場合（これをエージェンシー関係にあるという）に生じる非効率性のこと。この非効率性は、代理者が依頼人の利益よりも代理人自身の利益を優先させる行動を取る可能性があるため、依頼人の利益が損なわれることを指しており、エージェンシー・コストと呼ばれている。

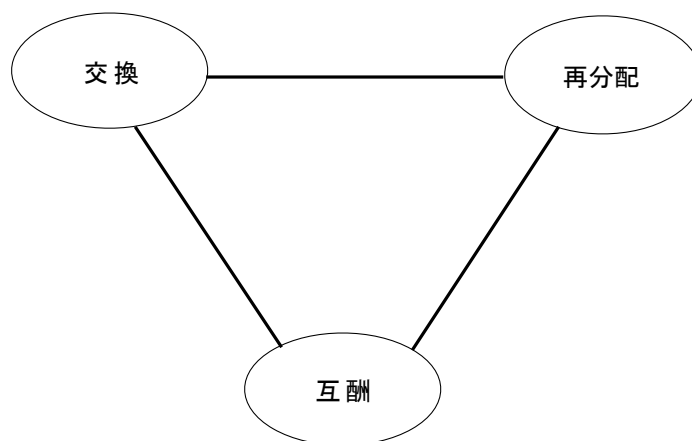
¹⁸ 詳細は、岡部（2018）を参照。

その中心に権力がありそれによる義務的徴収ならびに徴収分の分配である。そして交換は、市場における利己心に基づく財の移動ないし取引を意味する。

そしてこの三つが機能するうえでは、三つそれぞれに特徴的なパターンがあると彼は指摘した。すなわち、互酬では授受（授けることと受け取ること）が同一の性格を持つので対称性（symmetry）がある。また再分配では、権力が中央にあるので中心性（centricity）によって特徴づけられる。そして市場では、参加者が各自にもたらされる利得を目指して財の移動が行われるので、市場（market）がその機能を果たす仕組みだとした。そしてポランニーは、こうした三つの行動原理（ないしその組み合わせ）によって人類社会の性格とその変容が理解できることを強調した。

無論、現代社会はそれより前の社会と大きく変化した側面がある（例えば情報化）。しかし、ここで提示された三つの機能はどのような社会においても共通する機能であり、ポランニーの三つの部門の表現を換言するならば、交換→「市場」、再分配→「政府」、互酬→「コミュニティ」となる。これは、まさに筆者が提示する三部門の表現（市場、政府、コミュニティ¹⁹）に帰着する。この意味で「三部門モデル」は経済人類学の観点からみて一般性のあるモデルになっていることがわかる。

図表7 ポランニーによる人類社会の理解：三機能モデル



(注) Polanyi (1944 : 3 章)、ポランニー (1980 : 4 章) を踏まえて作成。

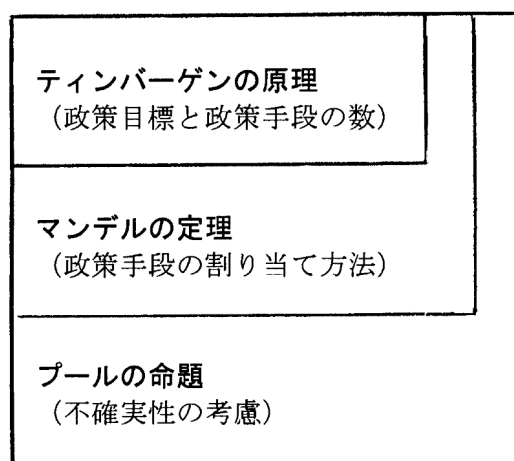
(出典) 岡部 (2022) 図表 8-3。

¹⁹ コミュニティの類似語として、第三部門、非営利部門がある。それらに関する概念整理は、岡部 (2022 : 8 章 3 節) を、また非営利組織の成立条件と存在理由については、同第 8 章 4 節をそれぞれ参照。

(2) 経済政策理論に基づく論証

上記の三部門モデルは、経済人類学から裏付けられるだけでなく、現代経済学の政策論における幾つかの基本命題を援用することによっても根拠づけられる。すなわち、経済政策運営に関する各種基本原則のうち、ティンバーゲンの原理²⁰、マンデルの定理²¹、ウィリアム・プールの命題²²の三つを想起し（図表8）、各命題の核心部分を援用すれば、社会を二部門で理解するよりも三部門で理解する方がより望ましい「社会状況」をもたらすことが理解できる²³。

図表8 経済政策運営の基本原則



(出典) 岡部 (2022) 図表 9-2。

ここでは、紙幅の制約があり詳細には立ち入らないが、次のような政策目標、政策手段ないし政策主体の事例を考えれば、この議論の妥当性を比較的容易にイメージすることができるでしょう。

いま、一国ないし一社会において、教科書的にいえば資源配分の効率化、そして所

²⁰ ある一つの政策手段（あるいは政策主体）が仮に複数個のどの政策目標に対しても最も効果的であるとしても、それだけで（複数個ある）全ての目標を達成することは不可能である（他の政策手段ないし政策主体）を追加的に導入する必要がある（より厳密に言えば複数の政策目標を達成するには政策目標と同数の政策手段が必要）、という命題。

²¹ 目標達成にとっては、比較優位の原則に基づいて政策手段を割り当てる（あるいは所定の目標達成にはそれに最も適した実施主体が関わる）必要がある、という命題。

²² 経済政策の運営においては、手段と目標達成の間には必然的に不確実性が伴うので、政策目標の達成にとって特定の手段が常に最適であるとはいえず、このため一般的には複数の政策手段を組み合わせて同時に活用することが必要かつ有効である、という命題（ウィリアム・プールが明らかにしたのは金融政策運営の場合であるが、それは政策論一般において成立すると推測される）。

²³ 詳細は、岡部 (2022) 9章3節を参照。

得分配の公平化、という二つの目標があるとする。この場合、前者の達成にとって最も効果を発揮するのは明らかに市場（市場機能）であり、後者を最も効果的に達成するのは政府である。つまり二部門モデルによって社会を理解すること（配分効率化には市場を割り当てる一方、分配公正化は政府の役割と位置付けること）に妥当性がある。

しかし、いま社会で新しい事態への対応が必要になったとしよう。例えば、美術館やコンサートでの芸術鑑賞、あるいは大洋における漁業資源の管理、という必要性が生じたとする。これらに対して効果的に対応できるのは、果たして市場か、それとも政府なのか。この場合、市場と政府だけを想定する限り、いずれが最適解かを結論するのは困難である。しかし、ここで第三部門（NGO ないし NPO あるいは一般的にコミュニティ部門）を導入すると、同部門の性格に合致した効果的な対応がそれによって可能になることが容易に想像できよう。

第三部門を積極的に位置づける必要性

上記事例は、社会を理解する場合、経済政策の三原則からみて第三部門がいかに必要かを示唆するものとなっている。なぜなら、ティンバーゲンの原理とプールの命題は、これら二つが共同することにより、社会問題解決のための手段ないし主体は数が多い方が望ましいこと、換言すれば第三部門が明確に認識され追加されるべきことの根拠を示唆しているからである。そしてマンデルの定理は、市場や政府によつて的確に対応できない各種「中間」領域に対しては「コミュニティ」（非営利部門や非営利組織）が対応することの合理性と効率性を示唆している。

社会を理解する場合、それを単に二部門で捉えるのではなく、このように三部門で捉えることが基本的に重要かつ不可欠である。より具体的事例を挙げるならば、例えば各種の社会サービス（介護、福祉、あるいは高齢化に伴う居住・医療・介護・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステム等）、環境保護（リサイクル等）など多様な課題に対応するには、第三部門の関与が欠かせないことが直感的に理解できよう。そしてこれらの領域では、人間的価値が重要な要素となっており、従って、ここでは強制や利己主義に基づく対応がふさわしいとはいえず、自発性、利他性、非営利性など、第三部門の性格を特徴づける人間的概念がキーワードとなる。

以上のように、公共政策の基本原則を援用するならば、社会システムは二部門モデ

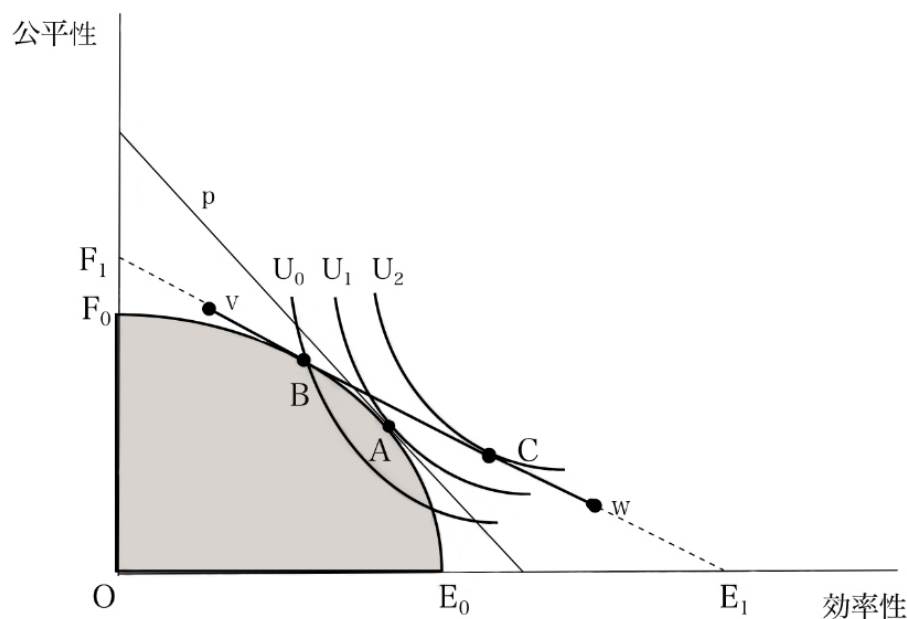
ルによってではなく、三部門モデルによって理解すべきである一方、そうしたシステムによって多様な社会問題の解決を図ってゆくのが効果的であり、また望ましい。これが経済政策の基本理論から導かれる結論である。

第三部門の積極的位置付けによる社会厚生向上

第三部門を積極的に位置付けることの必要性と適切性は、以上のように経済政策論の観点から理解できるが、それとは別に、経済学の一つの標準的理論モデルを援用して示すこともできる。

それは図表9のような図によってである。ここでは詳細な議論²⁴は全て省き、その考え方と結論をごく直感的に記載するに止める。まず、一国において効率性と公平性の程度は、社会に与えられた全ての資源を色々な度合いで組み合わせることによって実現させることが可能である（東北方向に凸の曲線 E_0F_0 ）。

図表9 社会を二部門でなく三部門で理解する場合の社会厚生



(出典) 岡部 (2022) 図表 9-4。

例えば、一国経済の全資源を市場関連資源と政府関連資源のいずれかの部門に結びつけて理解する場合（二部門モデル）を考えよう。その組み合わせ方に関しては、多

²⁴ 詳細は、岡部 (2022) 9章4節を参照。

様な選択が可能である（境界線の曲線 E_0F_0 を含むグレーの領域から自由に選択可能である）が、いまこの経済において A 点（の座標）が示す状況を選択しているとする。その場合の社会的満足度（社会厚生関数：U の曲線群）は、達成可能な水準のうち一番高い状況である U_1 の水準が実現している。

次に、経済に当初与えられた二つの部門（市場部門・政府部門）の資源をそれぞれ一定量だけ供出させ、その供出資源をもって性格が異なる新しい部門（コミュニティ部門）を構築する（この社会は前者を提供して後者を受け取るという一種の交換取引²⁵を行う）機会が与えられた、と考えよう。そうした社会変革が行われた結果、この社会における全資源の実質的な配分は、変革達成前には不可能であった C 点（の座標）で示される²⁶。その結果、この社会を構成する要素の組み合わせは当初の A 点から C 点へと変位する（効率性の観点からみると二つの部門から現実に供出する資源の組み合わせは A 点ではなく B 点の座標で示される）。その結果、社会的な満足度はそれまでの水準 U_1 からそれより高い U_2 へ向上することになる。

つまり、一国に与えられた資源の総量を念頭に置くと、社会を二部門（市場・政府）で理解するよりも、三部門（市場・政府・コミュニティ）で理解する方が国民の厚生にとって望ましいといえる。こうした発想は、社会の理解にとってだけでなく、公共政策の発想に際しても大切であることが、この理論分析から示唆されている²⁷。

第5節 個人の潜在能力を開花させる一つの「実践哲学」とその特徴

人間は誰でも大きな潜在能力を秘めている、というのがアダム・スミスの重要な認識であった。そう考えるならば、人間の潜在能力をどう引き出すかは経済学においても一つの重要な検討課題になる。なぜなら、人間の潜在能力を顕現化することは、本

²⁵ この図は、経済理論において比較的頻繁に登場するものであり、貿易取引（国内財と外国財の交換）や金融取引（現在の購買力と将来の購買力の交換）など各種の「交換取引」によって利益が生じることを示す図である（岡部 1999、12-13 ページ）。

²⁶ 直線 E_1F_1 の傾斜は、新部門（コミュニティ部門）を構築する場合、市場部門の資源と政府部門の資源の供出比率を示す。なお、交換取引の一つである貿易取引の場合、同様の直線は交易条件に、そして金融取引の場合は金利にそれぞれ対応している。

²⁷ 「三部門モデル」の考え方はこれまでも各方面で提起されており、その名称として、福祉の三角形、福祉ミックス、ペストフの福祉三角形、複合的経済の全体構造、市民的・連帯的経済、三つのメカニズム、三極モデル、三セクターモデル、など多様な呼び方がなされている（岡部 2022：9 章 4 節を参照）。ただ、それらの文献においては、いずれも三つの部門に関する記述的な説明にとどまっており、上記本文で述べたような経済理論的説明をしたケースは、筆者の知見による限り全く見当たらない。

人にとってはもとより、社会全体にとっても明らかに重要な課題だからである。この問題に対し、潜在能力アプローチという概念を導入して挑戦したのが経済学者・哲学者アマルティア・センであった（前述第2節「スミスの人間観（2）」を参照）。

本節では、そうした精神を継承する現代思想と位置づけうる一つの「実践哲学」を取り上げ、その要点を紹介する。こうした領域の研究は伝統的な経済学を相当はみ出すことになるが、社会科学や人文学の研究結果を総合的に活用しつつ個人と社会の究極的な豊かさと幸せを追求する研究は、その学問的呼称の如何にかかわらず意義のある研究方向であると筆者は考えている²⁸。

(1) 実践哲学の概要

近年、自己啓発（self-improvement ; self-development）に対する関心が高まり、それに関する書籍の刊行が増えている²⁹。自己啓発とは、自分の経済的、知的、あるいは情緒的な面において自分を高めるために自己鍛錬することを指す。すなわち、より大きい成功、より高い能力の獲得、より優れた人格の形成、より充実した生き方などを目指して、自己をより高い段階へ上昇させること（一言でいえば良い人生をもたらすこと）を目的として自発的に自らを鍛錬することである。

それらのうち、ここでは高橋（2018, 2019ほか）が提唱する「実践哲学」³⁰を取り上げる。それに注目するのは、そこでは単に自己啓発の最新思想が展開されているだけでなく、人間の性格（人格）を改善するための具体的かつ実践的な方法にまで踏み込んでおり、さらにその実践によって個人が潜在能力を引き出すこと（自己実現）によって社会に貢献することになった多くの実例が示されているからである。

その特徴

高橋が提唱する実践哲学の大きな特徴は、第一に、人間（人格のタイプ）は4つの類型（[図表 10](#)）によって理解できるとしている点にある。すなわち、人間がものごとを受け止める感覚の基準として「快か、苦か」（肯定的に捉えるか、否定的に捉え

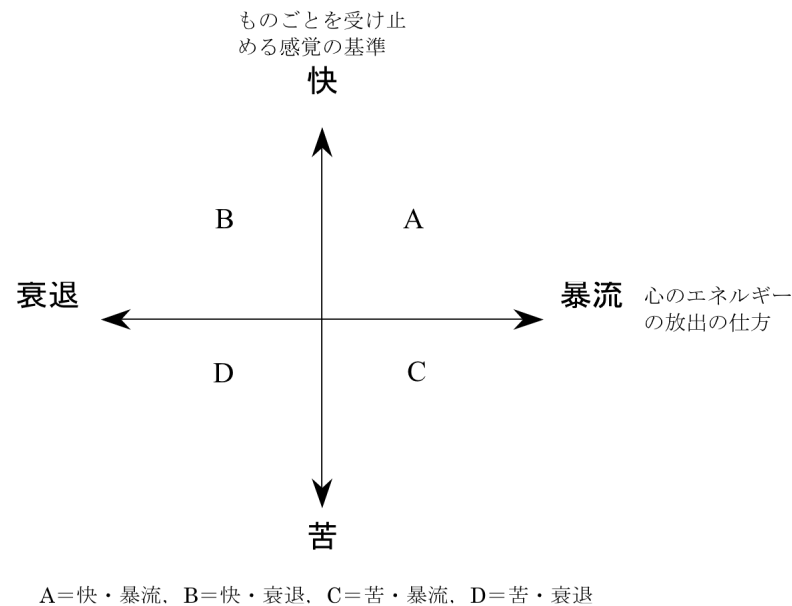
²⁸ 本節の詳細は、岡部（2022：13章）を参照。

²⁹ これらのうち特に注目されるもの（5件）とその概要については、岡部（2022）12章を参照。

³⁰ 高橋は、自分が提案するこの思想と実践の体系を「実践哲学」という呼称のほか、トータルライフ人間学、TL人間学、魂の学、神理の体系などといった表現を互換的に用いているが、本稿では、実践哲学と呼ぶことにする。

るか) という一つの座標軸を設ける。そして同時に、心のエネルギーの放出の仕方として「暴流か、衰退か」(激しい流出か、勢いの喪失か) という別の次元を設定している。そして、人間に現れる考え方と行動は、この二つの座標軸を組み合わせることによって出来上がる4つのタイプで理解できると主張している。

図表 10 人間の思考および行動における4つのタイプ



(出典) 岡部 (2022) 図表 13-1。

つまり、人間は誰でも無意識のうちにここで示される4つの要素(A~D。但し、人によってどの要素が最も強いかは異なる)を持つこと、そしてその事実自体を見破る必要があること、が強調される。こういう枠組みの中で自分の実像をまず理解すること、それがこの実践哲学の出発点となっている。そして、そのための各種手段(自己点検シート等。後述するとおりそのインターネット版も存在)が提供されている。

第二に、そうして発見した自己の性向を矯正して「中道」(4つの傾向いずれにも偏らない生き方)を達成する必要性が説かれるとともに、そのための多様な方法(自己訓練法など)が提供されていることである(ここではそれらの具体的説明は省略)。

そして第三に、上記二つのプロセスを踏むことによって自分の性格を認識するとともにそれを改善でき、その結果、自己の本来的使命を達成することによって幸せになるとともに社会に対しても貢献することが可能となる、という主張である。ここで注目すべき点は、この実践哲学の場合、その全段階を達成した実例の報告が非常に多い

ことである³¹。

(2)その評価

以上概観した実践哲学は、次のような5つの特徴を持つと評価できよう（岡部2017：第13章第5節）。すなわち（1）体系性（主要な用語や概念は全て明確に定義され一つの明確な体系をなしている）、（2）先端性あるいは科学性（ここで示された人間の感覚や行動は心理学など先端の科学的成果が生かされている）³²、（3）実践性（研鑽の手段や場が豊富に提供されている）、（4）実証性（多くの実践者によってその有効性が確認されている）、（5）社会変革力（自分の幸福感や行動だけでなく周囲や社会を変えてゆく力を持つ）を指摘できる。

とくに重要なのは、他の自己啓発書ではその主眼が専ら個人の幸せに置かれている（その段階で止まっている）のに対し、この実践哲学では、個人の幸せ達成（使命の遂行）がより良い社会のあり方と結びつけて捉えられている点にある、といえよう³³。

ちなみに、この思想とその実践は、各種社会科学の研究者によっても注目されており、例えば「現代的というよりは21世紀を見据えた未来志向的ともいえる部分を含んでおり、今後の発展が予測される」（沼田1995：177ページ）といった早い時点での評価があり、その後はこうした予告に沿った展開がみられている、といえよう。

科学性、先端性の一事例

この実践哲学の科学性と先端性を示す一つの事例をここで紹介しておこう。それは、自己の性格診断（上記図表10）のための方法が最近一段と現代化されていることである。従来は、高橋の書籍の中に記載されている設問に自分で回答するか、あるいは高橋の講演会の会場において紙面の設問に回答するか、のいずれかによってその結果

³¹ そうした事例の一覧表は、岡部（2017）13章図表13-8、岡部（2022）13章図表13-2を参照（それぞれ7事例を要約）。

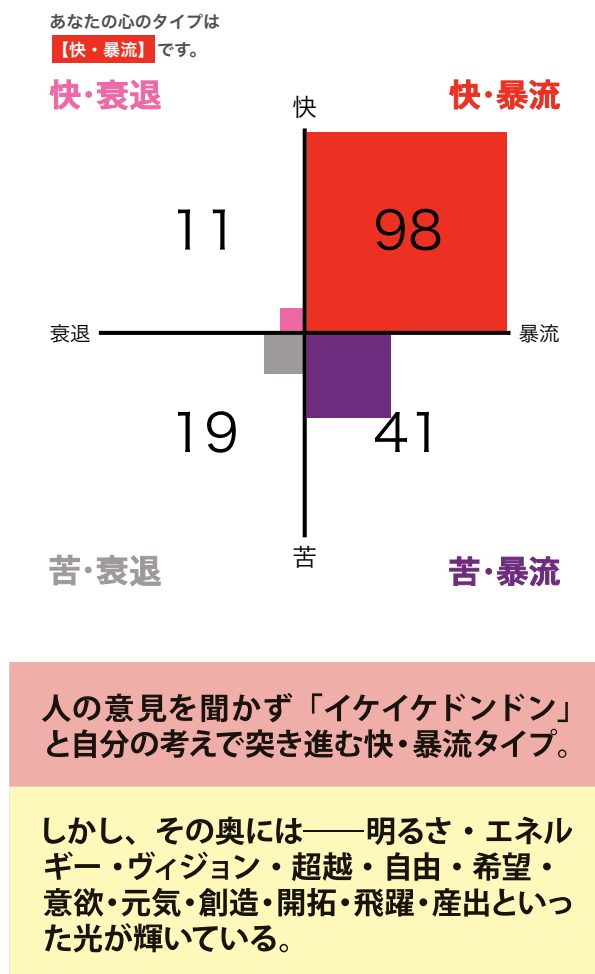
³² 例えば、この実践哲学は、自己啓発の領域において一つの主流となっている心理学（アドラー心理学）の発想と結果的にほぼ同じ発想に立っているといえる。さらに、現代心理学におけるピグマリオン効果、リングルマン効果、ジョハリの窓、正常性バイアスなど多くの成果が取り込まれており、また行動経済学におけるナッジという手法、熱力学のエントロピー増大の法則など、多様な研究領域の概念や成果が至るところに巧みに織り込まれている。

³³ この実践哲学は「人間と世界の可能性を最大限に発揮するための叡智でもあります」と高橋は表現している（第3次The Gate Series Seminarの案内リーフレット）。

が得られるものであった。しかし、2019年秋以降は、インターネット上で所定の画面³⁴にアクセスし、そこに順次出てくる36項目の質問に逐次回答することによって誰でも簡便に、そして直ちに（しかも無料で）診断結果が得られるシステムが提供されている。

参考までに、筆者（岡部）がこの「自己診断チャート」に取り組んだ結果（の一部）を**図表 11**として掲げておこう³⁵。同図の上半分では、被験者（岡部）の性格がどの

図表 11 自己診断結果：一つの事例



（出典）岡部（2022）図表 13-1。

ようなものであるか、つまり前掲図（**図表 10**）の4つの人格パターンの要素それぞれ

³⁴ <https://bk.jsindan.net>

³⁵ この結果は第三者に見せるべき性質のものではないが、この診断システムの仕組みとその妥当性が実感できるものであることを示すために、あえて掲載している。

れをどの程度持つか（いわば性格を要因分解した結果）³⁶、が定量的に示されている。そして同図の下半分では、被験者において最も強いと診断された性格の特徴（快・暴流ということの意味。改める必要がある側面）がまず説明されるとともに、それが持つ望ましい側面も表わされている。さらに（ここではその図の掲載は省略するが）被験者の性格のうち望ましくない側面を矯正する一方、そこに含まれる望ましい要素を取り出すにはどのような鍛錬（心の育成）をすればよいか、についても簡潔に図示されている。著者（岡部）は、これらの図表を見て自分にこのような傾向があったのかと驚かされるとともに、そうした診断結果は腑に落ちるものだと感じた。またそこで示された自己啓発の方向も納得した次第である。

なお、この実践哲学を研鑽するには、従来は講演会や所定の会場への出席によって対応されていたが、コロナ禍（2020年春）が襲来したことに伴い、自宅に居ながら受講できる便利なオンライン研鑽システムが導入されている。

この実践哲学は、米国で指摘されている現代人の傾向ないし嗜好（SBNR: spiritual but not religious）に合致した側面を多く持っているので、今後注目が高まる可能性が少なくないと思われる。

結語

経済学研究者は、より良い社会を構築するという究極的な願いを心の底深く持っていることが研究姿勢として求められているのではなかろうか³⁷。幸いなことに、前著（岡部 2017）の概要を学会で発表したとき、若手研究者が「自分もこのような研究を志したい」と話しかけてくれたことがあった。主流派経済学から外れる研究にはリスクが大きく、また人一倍の努力が求められるだろう。しかし長期的にみれば、そのような研究には大きな報いが期待できると筆者は確信しており、志の高い若手研究者に対して激励の言葉を贈りたい。

以上

³⁶ 4つの人格パターンおよび各人格の3つの回路については、多くの人々について統計分析（因子分析）した結果、その妥当性と頑健性が確認されている（高橋 2019：292-293 ページ）。なお、一般の自己啓発書（特にビジネス関係書）においては「快・暴流」が望ましいことを示唆するケースが多いが、それは必ずしも正しい方向ではない（高橋 2019：227 ページ）。なぜなら、それは強い負の副作用を持つ（同 229-231 ページ）うえ、持続可能性を欠くからである（同 261 ページ）と説明されている。

³⁷ イギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルは「冷静な頭脳を持つ一方、暖かい心をも兼ね備えていること」（cool head but warm heart）が経済学研究者の条件であると 136 年前に述べている（Marshall 1885: 57 ページ）。

別紙1 『ヒューマノミクス—人間性経済学の探求—』（岡部2022）目次

序文

序章—本書の狙い、構成、概要

第1部 人間を対象とする学問としての経済学

第1章 人間性を重視する経済学の必要性

- 第1節 近年における経済学の発展
- 第2節 主流派経済学の光と影
- 第3節 前書『人間性と経済学』（2017年）の主要論点
- 第4節 本書の研究内容：どの面で前書を拡充・発展させたか

第2章 アダム・スミスの人間観(1)：市場・倫理・善

- 第1節 主流派経済学と人間性を重視する経済学
- 第2節 アダム・スミスの人間観と社会観
- 第3節 市場取引と「善き生」の相克

第3章 アダム・スミスの人間観(2)：人間の潜在能力

- 第1節 アダム・スミスが前提した人間の潜在能力
- 第2節 良い生活に対する三つのアプローチ
- 第3節 アマルティア・センによる潜在能力論の展開
- 第4節 潜在能力を引出す一つの方法：実践哲学

第4章 人間の本性と社会経済システム：その捉え方

- 第1節 関連書籍4点の選択
- 第2節 書籍4点それぞれの主要論点
- 第3節 人間の本性と社会経済システムについての示唆
- 第4節 新型コロナウイルスの社会的影響：一つの考察

第II部 社会の理解方法：なぜ革新が必要か

第5章 人間は利己心のほか利他心も併せ持つ

- 第1節 利他心の意義、種類
- 第2節 幾つかの学問領域からみた利他心の理解
- 第3節 幸福と健康にも資する利他的活動
- 第4節 利他的行動を理解するための一つの経済モデル

第6章 人間は社会的ネットワークの中で生きる存在

- 第1節 人間相互のつながりとネットワーク科学
- 第2節 社会的ネットワークとその特徴
- 第3節 社会的ネットワークは共有資源を創出する
- 第4節 方法論的個人主義の限界：ネットワーク視点の必要性

第7章 サービスに重点を置く社会観の必要性

- 第1節 現代経済におけるサービスの重要性
- 第2節 サービスに重点を置く社会観
- 第3節 新しいサービス学は社会科学統合へ一石を投じる
- 第4節 新しいサービス学の課題

第 III 部 経済学の再構築：三部門モデルへの拡張

第 8 章 人間社会の的確な理解：三部門モデル

- 第 1 節 二部門モデルから三部門モデルへの拡張
- 第 2 節 三部門モデルの経済人類学的根拠
- 第 3 節 概念整理：コミュニティ、第三部門、非営利部門
- 第 4 節 非営利組織の成立条件と存在理由

第 9 章 三部門モデルの政策理論的根拠

- 第 1 節 主流派経済学の政策論の歪みとその是正
- 第 2 節 三部門モデルの概要
- 第 3 節 経済政策の基本原理に立脚
- 第 4 節 三部門モデルと社会厚生：理論的説明
- 第 5 節 従来の類似モデルとの対比

第 10 章 政策例（1）：市場の賢明な活用

- 第 1 節 市場と社会的善の相互作用
- 第 2 節 スイスの農業政策（1）：政策原理に合致
- 第 3 節 スイスの農業政策（2）：日本への教訓

第 11 章 政策例（2）：企業と組織の良いガバナンス

- 第 1 節 営利企業のガバナンス：三つの接近法
- 第 2 節 非営利組織のガバナンス：本来的な不明確さ
- 第 3 節 コンプライアンス（法令遵守）よりもインテグリティ
- 第 4 節 インテグリティの必要性は上昇

第 IV 部 未来を拓く「実践哲学」

第 12 章 自己啓発はなぜ「より良い人生」をもたらすのか

- 第 1 節 自己啓発の意義、関連書籍の隆盛
- 第 2 節 検討対象とする書籍の選択
- 第 3 節 代表的 5 冊の概要
- 第 4 節 導かれる含意

第 13 章 未来を拓く「実践哲学」の特徴と新展開

- 第 1 節 「実践哲学」の概要と特徴
- 第 2 節 研究者による評価と予測
- 第 3 節 最近の多面的な展開と高度化
- 第 4 節 継続的に発展する理由

第 14 章 スピリチュアリティ、より良い生き方、より良い社会

- 第 1 節 米国における“SBNR”傾向の広がり
- 第 2 節 スピリチュアリティ、宗教、そして SBNR
- 第 3 節 SBNR の評価と展望
- 第 4 節 日本にとっての含意

結語

引用文献

索引

別紙2 本書(岡部 2022)で深化・発展させた研究結果

	前書では検討の余地があった課題	本書で深化・発展させた研究
1. 現代の主流派経済学について	<p>(1) 経済学には最近どんな新しい展開がみられるか。</p> <p>(2) 社会をより本質的・包括的に捉えるための研究は近年どう発展しているか。</p>	<p>(1) 幾つかの新研究（行動経済学など）を紹介するとともに評価 [1]。</p> <p>(2) そうした研究は専ら経済学以外の領域（社会学、心理学等）においてなされているので、経済学者はそれらに目を向けるべきことを強調。本書はこれらの視点を取り入れ、前書の分析を拡充、深化 [1] [4]。</p>
2. 研究方法と視野について	<p>(1) 現代経済学は、本質的にアダム・スミスの思想とくに『国富論』を継承して発展してきたと理解してよいか。</p> <p>(2) 一方、スミスには『国富論』と並ぶ名著『道徳感情論』がある。これをどう位置づけ、援用するか。</p>	<p>(1) 確かに、現代経済学では『国富論』における人間観を継承し、市場、競争など厳密な（数学的）分析を行い易い側面を中心に発展。それを改めて確認 [1] [4]。</p> <p>(2) スミスの思想を全体的に継承し、経済学を「人間を対象とするバランスのとれた学問」にするため、二つの新しい視点を導入。一つは、市場・倫理・善の相互関係 [2]、もう一つは、人間の潜在能力 [3]。</p> <p>(3) 近年の経済では、財よりもサービスに重点が移行しているのでその視点も導入、その場合の社会観の特徴を解明 [7]。</p>
3. 人間の行動動機とその社会的帰結について	<p>(1) 人間は、利己心のほか利他心も併せ持つとされる学問的根拠は何か。</p> <p>(2) 人間社会を理解するうえで、主流派経済学に欠落している最も重要な視点は何か。</p> <p>(3) 社会を二部門（市場・政府）モデルでなく三部門（市場・政府・コミュニティ）モデルで理解するための更なる根拠はあるか。</p>	<p>(1) 人間の利他心は、心理学のほか神経生物学など自然科学の研究によっても確認される [5]。また経済学においても、利他的行動に伴う満足感を取り込もうとする萌芽的研究が存在 [5]。</p> <p>(2) 人間は社会的ネットワークの中で生きる存在という認識を欠落している点に最大の問題。それを是正すると、ネットワーク科学など多くの学問領域を援用して人間および人間社会を深く理解可能 [6]。</p> <p>(3) 三部門モデルの嚆矢はポランニーによるそれであり、著者のモデルはその現代版という性格を持つ [8]。その妥当性と有用性は、現代経済学の概念や分析ツールを援用して理論的に説明可能 [9]。また公共政策の倫理的帰結も充足 [9]。</p>
4. 個人の幸福とより良い社会の構築について	<p>(1) 個人の幸福（意義深い人生）追求と良い社会実現の同時達成を目指す「実践哲学」の特徴は何か。</p> <p>(2) その思想は、普及の条件といえる論理性、体系性、実践性、実証性、普遍性をどの程度具備しているか。</p>	<p>(1) その発想は経済学の場合とは異なるが、究極的目標において両者は合致 [11]。</p> <p>(2) その自己研鑽方法は哲学的・心理学的・統計学的基礎を持つうえ、そこから導かれる個人の使命達成が、より良い社会の構築に貢献する点（豊富な実例がある）に特徴 [12]。その思想は現代人が好むスピリチュアリティの要素も併せ持つ [13]。</p>

(注) 1. 本書で深化させた研究は、例えば [1] と表示しているが、それは本書の第1章で提示していることを示す。なお「前書」は、岡部（2017）を指す。
 2. 本書全体の内容をもとに著者が作成。

(出典) 岡部（2022）図表 1-7。

引用文献

- 伊丹敬之（1987）『人本主義企業—変わる経営 変わらぬ原理』筑摩書房。
- 岡部光明（1999）『現代金融の基礎理論—資金仲介・決済・市場情報』日本評論社。
- 岡部光明（2017）『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして』日本評論社。
- 岡部光明（2018）「社会理解のための三部門モデル：従来の各種提案とその特徴」、明治学院大学・学術論文公開ウェブサイト。〈<http://hdl.handle.net/10723/3413>〉
- 岡部光明（2022）『ヒューマノミクス—人間性経済学の探究』日本評論社、5月刊行予定（約450ページ）。
- 篠原三代平（1984）『ヒューマノミクス序説—経済学と現代世界』筑摩書房。
- 高橋佳子（2018）『最高の人生の作り方—グレートカオスの秘密』三宝出版。
- 高橋佳子（2019）『自分を知るカー「暗示の帽子」の謎を解く』三宝出版。
- 中島隆博（編）（2021）『人の資本主義』東京大学出版会。
- 沼田健哉（1995）「GLAの研究」『宗教と科学のネオパラダイム—新新宗教を中心として』113-179ページ、創元社。
- ポランニー、カール（1980）「統合の諸形態と支える構造」『人間の経済 I—市場社会の虚構性』（玉野井芳郎・中野忠訳）岩波現代選書47、岩波書店。
- 宮島英昭（2011）「人本主義」、労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』609号、58-61ページ。
- Heuser, U. J. (2008) *Humanomics : Die Entdeckung des Menschen in der Wirtschaft*, Campus Verlag. (邦訳：ウヴェ・ジャン・ホイザー『感情が経済を動かす：新しい経済学「ヒューマノミクス」の革命的挑戦』柴田さとみ[訳]、2010年、PHP研究所)
- Marshall, Alfred (1885) *The Present Position of Economics: An Inaugural Lecture*, London: Macmillan and Company.
- McCloskey, D. N. (2021) *Bettering Humanomics : A New, and Old, Approach to Economic Science*, University of Chicago Press.
- Polanyi, Karl (1944) *The Great Transformation*, New York and Toronto: Rinehart & Company. (邦訳：カール・ポランニー『「新訳」大転換：市場社会の形成と崩壊』野口建彦・栖原学[訳]、2009年、東洋経済新報社)

Smith, Adam (1759, 1790) *The Theory of Moral Sentiments*, 1st edition in 1759; 6th edition in 1790: Clarendon Press Oxford in 1976. (アダム・スミス『道徳感情論』村井章子・北川知子訳、原著第6版、2014年、日経BP社)

Smith, Adam (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1st edition; The Modern Library edition published in 1937. (アダム・スミス『国富論』山岡洋一訳、2007年、日本経済新聞出版社)

Smith, V. L., and B. J. Wilson (2019) *Humanomics : Moral Sentiments and the Wealth of Nations for the Twenty-First Century*, Cambridge Studies in Economics, Choice, and Society; Cambridge University Press.

* * *